

スペンサー進化論に関するジェヴォンズの考察

Jevons on Spencer's Theory of Evolution

阿 部 秀二郎

Shujiro ABE

はじめに

ハイエクは、1970年代のアメリカにおいて、政府による貨幣発行がインフレーションを回避できない状態におくこと、さらにインフレーションの実物経済への悪影響を懸念し、貨幣の国家独占を停止すること、つまり民間が自由に貨幣を発行できるようにして、競争を通じて貨幣供給を安定化させる目的で、貨幣発行自由化論を書いた。

ハイエクは、自らの発想が独創的なものであると認識しているが⁽¹⁾、歴史的に独創性を裏付けるために過去の経済学者について、研究した。そこで名前が挙げられているのが、社会進化論が有名なハーバート・スペンサーやフランスの自由主義経済学者のジョゼフ・ガルニエである。その際にハイエクはスペンサーの貨幣自由化論について、ジェヴォンズの『貨幣及び交換機構』を導きの糸として、自らの見解とスペンサー・ジェヴォンズとの比較を行う。

(Hayek [1990] p.15 訳18頁)

スペンサー及びハイエクは、自由論の位置づけにおいて、政府の役割を極端に小さく捉えるリバタリアンに位置づけられる（森村 [2005] 126-129 頁, 203-204 頁）。他方で、ジェヴォンズは一定の政府の役割を認識し、それらと理論との接合とを終始有した。したがって市場と政府との関係において、ハイエク・スペンサーとジェヴォンズとの相違は明白である。しかしその内実について明確ではない。

阿部 [2010] では、分業の発展に基づく生産力についてのジェヴォンズの考え方における「進化」の影響について指摘したが、本稿ではジェヴォンズがこの進化とスペンサーの考え方についてどのように見ていたのかを分析することを目的とする。

I. では、ジェヴォンズによるスペンサー進化論の肯定的評価について、考察する。II. では、ジェヴォンズによるスペンサーの考え方に対する否定的評価について、考察する。III. では、ジェヴォンズによるスペンサー貨幣論に対する解釈と評価について分析する。

(1) 1970年にベンジャミン・クラインが「貨幣の競争的供給」という論文を書いていたことについて、ハイエクは着想以後に認識したと指摘している。(Hayek [1990] p.12 訳11頁)

I. ジェヴォンズによるスペンサー進化論の肯定的評価

1. *Nature* 論文

ジェヴォンズによるスペンサーへの言及の多くは、1873年から1877年頃までに散見される。⁽²⁾ この時期は、『経済学の理論』初版を出版した後に、経済学という複雑な現象に対しても自然科学を適用できる可能性を展開するべく『科学の原理』を著し、他方で、自らの理論の革新性を確認するために大陸も含めた文献を歴史的に遡及する時期でもある。科学的な研究においても同様に歴史的に遡及している。1873年に*Nature* 誌に掲載された「適者生存についてのモーペルテュイ」と題された論文では、ダーウィン、スペンサーの進化概念についても、その先駆的な業績を残した18世紀半ばに活躍したフランスの数学者でもあり物理学者でもあるモーペルテュイ (Maupertuis) が引き合いに出されている中で論じられている。その考え方は間違っただけで外的事情 (chance) に関連する適者生存の概念が指摘されているとジェヴォンズは指摘する。(PC IV p.4) その論文において、進化概念の重要性は明確に認識されているという事実から、概念の歴史的な遡及をジェヴォンズは試みたのである。⁽³⁾

2. 科学の原理

2-1. 問題の出発点

1872年から1873年の間に、『コンテンポラリーレビュー』誌上で、グラッドストーンとスペンサーとの間で、進化と宗教に関する論争が繰り広げられた。

この経過は多少説明を要する。

まず、スペンサーが『コンテンポラリーレビュー』誌で、『社会学研究』としてまとめられる論文を、1872年から随時公表していったのだが、第2章の「社会科学は存在するか」という論文が出版された後で、グラッドストーンが進化論に対する批判を行った。これに対してスペンサーが1873年の同誌上の「結論」において、グラッドストーンを「反科学的な見解の信奉者」と反批判したのである。(PC IV p.38, Duncan [1996] pp.162-4)

グラッドストーンとスペンサーとの論争に対して、グラッドストーンと同じリバプール出身であったジェヴォンズは、『科学の原理』の最終章で、グラッドストーンに対して一種の啓蒙を行っていると指摘できる。

『科学の原理』初版 (1874年) をグラッドストーンに進呈する手紙においてジェヴォンズは、次のように書いている。

(2) 最初のスペンサーについての言及は、ジェヴォンズが21歳(1857年)の時の日記に記されている。その中ですでに神のデザインと進化概念とが矛盾しないことが指摘されている。(PC I p.52)

(3) ジェヴォンズの論文を見たブリュワー (W.H.Brewer) は、モーペルテュイのダーウィンへの影響について、進化概念においては存在しないと推論する。根拠はダーウィンがモーペルテュイに言及していることを確認できるのは、物理学に関連する部分であり、生物学や進化の概念が包含されている著作ではないからだとしている。(PC IV p.15)

『科学の原理』はあなたの注意をそれほど引くとは思っておりません。かなり、技術的な論理的または科学的問題を取り扱っておりますので。しかし思い切って最終章に「科学的方法の限界と結果」を加えました。あなたがリバプールでの講演で、そしてその後出版された手紙で扱った問題に関係する問題です。その著作はしたがってあなたにとって興味のわかないものではないとは、言えないでしょう。」（PC IV p.36）

さらに、『科学の原理』初版の序章（1873年）において、ジェヴォンズは、最終章を加えた理由について、次のように述べている。

「我々は適切に法の支配と呼ばれる物について聞いてきたし、自然の諸力の必然性と均一性には、自然的事象の経路に介入しうる知的で博愛的なパワーが存在しないのだと解釈されてきたことはまれにしかなかった。科学的方法の進歩は、ゆえに人間の情の中で最も優しい信念を失わせることが懸念されてきた。「宗教の効能」でさえ、議論のテーマとして真面目に取り上げられるのだ。その方法の究極的な結果と限界とに言及することは、科学的方法に関する著作にそぐわないようには思えなかった。」（Jevons [1877] p. xxxi）

こうして、ジェヴォンズは19世紀末のこの時代に科学が進行する半面で、既存の自然や神についての考え方が大きな変動にさらされている状況を指摘するだけでなく、それらの考え方に対して科学がどのような対応をとるべきかという困難な問題に対して、見解を提示する必要を説いたのである。そしてこの提示こそ、グラッドストーンとスペンサーとの議論が契機の一つであると位置づけることができるだろう。

2-2. 「科学的方法の結果と限界に関する考察」

『科学の原理』最終章で展開している内容は、その章のタイトルが示している「科学的方法の結果と限界に関する考察」である。端的に内容をまとめると、次のようになる。

科学的観察の対象とすべき現象の発生についての考察と、現象の発生から結果へと至る経過についての観察に基づく分析とを識別した上で、対象とすべき現象の発生事情は歴史的にまた様々な諸条件の存在で考察が不可能な「不定問題（indeterminate problem）」なので、発生から結果へと至る経過の分析は限定的にならざるを得ない。しかし、科学者の中には、または科学的思考を展開する者の中には、経過を観察する限定的分析をもってすべてが実証されたと認識してしまう誤謬に気付かない者がいる。科学にはなすべき仕事が残されていないと認識している者もいる。さらに、観察分析された法則で説明できることを根拠に、考察が不可能な現象発生にまで立ち入り、その発生についても断じてしまう傾向も存在する。

自然法則には相反する傾向を有する力が作用するように、その法則に階層性も存在するし、過去から未来へと現象が均一的に発生する「自然の均一性」の概念は、攪乱的な現象が過去にも存在しなかったし未来にも存在しないという厳格な意味に解釈されるべきではな

く、攪乱的な現象に遭遇するとしても理論的に反証されるところにまではいかないという意味で柔軟に把握されるべきである。

科学的方法に関するジェヴォンズのこのような慎重な姿勢は、科学的知識の増加に伴い、その知識ですべてが理解でき、かつ予想できるという楽観的な科学観を牽制していると指摘できる。その科学観を有する思想家としてジェヴォンズが引き合いにだすのが、ミルとコントである。

「最近の思想家、特にオーギュスト・コントそして部分的にはジョン・スチュアート・ミルの著作の中に、我々の知識が、ほぼ完全なものを仮定するものとして表す間違ったそして有害な傾向が存在する。……彼らは読者に、我々の科学的方法による成功によって、我々が理解できるのは、理解すべきものの全体の僅かに小さな部分でしかないという……事実に関する印象を、与えることができていない。」⁽⁴⁾ (Jevons [1877] pp.752-3)

ジェヴォンズは、数学という分析ツールの未発展状態は新事実の分析を結果的に無視することになり、新しい科学的事実が多く散見されているのに、それらの新しい事実の存在に目をつぶる、科学者の姿勢を批判する。なぜならば、新しい事実の積み重ねにより法則がより確証の深いものになったり、法則が修正を受けたり、場合によっては破棄される可能性を排除することになっているからである。

そして、自然科学に限定されず、社会科学においても事情は同様という認識をジェヴォンズは有する。したがって当時の数学的分析ツールの処理能力と当時の事実の複雑性とを天秤にかける。社会科学は、自然科学よりもはるかに法則と一致しない事情が多いことをジェヴォンズは認め、安易な抽象理論の代表例として、社会の知的段階論を提示したコントにさらなる批判を加えることになる。⁽⁵⁾

このような当時の分析ツールの不完全性の認識、新事実の発見、複雑性の認識などは、当時の科学の未完成状態を説明することになるとともに、その後の可能性を示唆することにつながる。そして、このことで一方では、神との対峙における人間の不完全さを指摘することが可能になる。なぜならば、自然法則が均一的に理解されてしまうならば、人間は未来に渡り、宇宙も含めた万物を理解することができることになり、神の存在を必要としなくなる可能性が出てくるからである。さらに一方では、こういった認識は進化概念と近似性を有すると指摘することができる。なぜならば、スペンサーの進化論に基づく人間は、多様化、差異化されることになる。必然的に科学が観察し、分析しなければならない対象が多様となり

(4) 『経済学の理論』第2版(1879年)の下地になる表現であると指摘できる。(Jevons [1879] p.1 訳 viii 頁)

(5) 社会科学が対象とする現状の複雑性について、ジェヴォンズは現代の複雑系の論理をすでに展開していると指摘できる。「人事において、最少の原因が最大の結果を生み出す…」とあるように、最少部分が最大の変化を生み出すという論理は、バタフライ効果の近似概念と指摘できるものである。(Jevons [1877] p.761)

複雑となっていくのだから、科学は不定な状態に止まることになるからである。

「ハーバート・スペンサーの進化論は、全ての固有な差異の源について説明すると主張する。……スペンサーはこう言う。同質性は不安定でありそれ自身差異化していくことになっている。そしてそれゆえ人間の制度と特徴とは多様になるのである。」(Jevons [1877] pp.261-2)

次の問題は、したがって神と進化論との関係になってくる。ジェヴォンズは物理的な物体の発生は時間軸や空間軸で不変的であるのに対して、有機体ではまったく異なるというアガシー (Agassiz)⁽⁶⁾ の論理を引用しながら、生物の生殖細胞などの例を用いて、顕微鏡で考察した場合に均一的な細胞であってもその成長にしたがい相違が顕在化する原因として、可視化できない要素の存在を認める⁽⁷⁾。また、多様性の発生に関して、その原因や状況は多くの不定問題に対する扉を開くことになる。つまり可視化できない要素や発生の原因や状況において、創造主の意思が存在したと考えることができることをジェヴォンズは示唆する。

「科学的な知識の価値についてここまで考察したことから、ある明確な結論を引き出す。自然の進行における神の介入の可能性を反証することはできないのである。」(Jevons [1877] p.766)

この引用から理解されるように、ジェヴォンズの科学的方法論は、反証されるまでは仮説的な状況は存在し続けるという反証主義と指摘できる。⁽⁸⁾ 可視化されるまたは計測されるもので検証することができる現象のみを前提にするコントの実証主義的なスタンスでは、神の存在は検証されないために、範疇外に落とし込まれることになる。対して、反証主義のスタンスに立てば、反証されない現象は否定されない。ゆえに、神の存在可能性は否定されないという論理になる。

Ⅱ. ジェヴォンズによるスペンサー進化論の否定的評価

1. 神とスペンサー進化論

I の 2. で見てきたように、ジェヴォンズの論理では、神の存在と進化論（または諸科学

(6) スイス人の自然科学者で、化石の研究を通じた研究に基づき「発生学」を展開し、それらから得られた推論と神による創造とを結び付けようとしたとされる。(Bowler[2003]p.122 訳(上)206-8頁)

(7) メンデルの遺伝子に関する業績が認識されるのが1900年に至ってのことであるから、もっと早くに業績が公開されていた場合に、ジェヴォンズの考察はより輝きを放つことになっていたであろう。(Bowler [2003]p. 261 訳(下)439 頁)

(8) ジェヴォンズ自身は、自らの考え方を「真の実証主義的思想」と表現していると思われる。(Jevons [1877] p.768) いまだボパーの反証主義という用語は利用されていないのだが、通常表現される「実証主義」のコントの方法は、ジェヴォンズにしてみると「誤ったマイナスの学説」であり、その根拠は「真の科学は計測できないからといってその存在を否定すべきではない」のに、コントはそれらを否定していると解釈されるのであった。こうして、ジェヴォンズは真の実証主義＝反証主義、偽の実証主義＝実証主義と区別していると思われる。

の展開)とは、矛盾するものではなく、むしろ相補的な関係になると指摘できる。しかしこの考察はあくまでもジェヴォンズの論理内のことである。ジェヴォンズの『科学の原理』を読書した後にグラッドストーンがジェヴォンズ宛に出した手紙で、グラッドストーンは次のように、神の存在と進化論との相補関係を展開している。

「進化学説は、もし真実ならば、私が判断すると、神の偉大さについての考え方を増すことになる」と指摘せざるを得ない。というのも、学説によって、創造のすべての段階は、……読み易い予言となるからである。」

しかし、このグラッドストーンの解釈はジェヴォンズの論理を通してという条件を前提においておかなければならない。つまりⅠの2-1. で見たように、スペンサー進化論に対して、神によるデザインの可能性を否定するものと解釈する当初のグラッドストーンのスペンサー批判は、むしろ当時は一般的であったとジェヴォンズ自身も認めている。先ほどのジェヴォンズ宛の手紙に対するグラッドストーンへの返信手紙において、ジェヴォンズは次のように指摘する。

「……今や進化論は発見者以外にも何千という人々が所有するものとなっています。そして、学説を受け入れた多くの人々は、明らかにデザインと進化学説とは一致しないと想像しています。私には単純な論理的誤認と思われるのですが。」(PC IV p.42)

つまり、『科学の原理』による補足的な説明のない状況で、スペンサー進化論を神の存在と一致するものと理解しようとするのは、当時は極めて困難であったことが理解される。したがって以下では、スペンサー自身の宗教的背景に目を向けることで、その背景がスペンサーの著作に与えたと思われる影の部分に目を向けていこう。そしてこの点についてジェヴォンズも認識していると思われる部分を最後に、示すことにしよう。

2. スペンサーの宗教的背景

スペンサーが『社会静学』にまとめ上げ、その後の著作が展開されるきっかけになった萌芽は、1842年から43年にかけて『非国教徒 (Non Conformist)』に掲載された投書をまとめた「政府の固有領域」である。(山下 [2008] 26-7頁) 12の投書から構成される「政府の固有領域」と『社会静学』を中心に、彼の宗教的背景を見ていく。

スペンサーはすべての物には、法則があるように、人間にも本能がありそれらに従うことで健康状態を保てると主張する。さらに精神においても同様であり、その自然状態に従わない場合には何らかの罰を受けることになる。したがって、自然状態に置かれることで社会は事情作用を発揮する。その中で政府を必要とする根拠を問うスペンサーが行きつく結論は、自然権を守る機能ということになる。

スペンサーは、具体的な事例において、国家の自然権を守る機能について論証していこうとする。穀物法は、国内農業を維持し疲弊しないための「一般的な善」とされるが、政府は

自然権を守る「正義」を貫徹するならば、穀物法は廃棄されることになる。さらにスペンサーは国教会を引き合いに出す。議会の支援を受けなければ拡大しない宗教を残存させようと試みることで、つまり国民に「良心の権利」を与えないで、国民が信じようとしないうものを強制することは、自然権を阻害することにもなる。（Spencer [1981] p.190）さらに救貧法においては、現在貧困に窮する階級が代々階級的に抑圧されてきたことが原因であること、つまり豊かな状態になる機会さえ与えられないことが論証されないかぎり、救貧は認められるべきではないと主張する。

いずれにおいても、規制や奨励などの政策が存在しない場合の自然状態において国民が有する自然権が疎外されていることが明確ではないかぎり、国家は介入するべきではないという姿勢は一貫しており、スペンサーはその姿勢を非国教徒（Nonconformist）の特徴に求めていると指摘できる。なぜなら非国教徒は「便宜ではなく、原理に基づき行動し、大衆的に忌み嫌われようとまたは受け入れられようと、それらと関係のないしっかりとした考え方に従うことを明言している」（Spencer [1981] pp.192-3）からである。

スペンサーは便宜について完全に否定しているわけではない。たとえば穀物法は、一時的にかつ部分的に利益を与えることはあっても、最終的には全体の利益にはならないという点で便宜という面からも否定されるべきであるという考え方を提示するが、それらの政治的な決断を下す困難性を認識していたスペンサーは、原理を土台に据える方が安全であると考えていると指摘してよい。

そしてその考え方は、スペンサーそして後にはハイエクに通じる人間性の「不完全性」の認識したがって教育の重要性と関連することになる。

7番目の投書で、スペンサーは社会制度において国家の介入が脅かしている最も重要なものとして教育を挙げている。端的に言えば、国家教育という形での「教育の統一制度」は、有益ではない。なぜならば、人間には神が与えた向上または改良の欲望が存在していることであり、人間社会が最も発展するのはそれらの欲望が達成されない状況に人間が置かれること、つまり好ましくなくまたは不快な状況の方が欲望を実現する状況としてふさわしいことになるからである。

この考え方の背後には、教育における多様性と議論との必要性が内包されている。したがって国教会による宗教的な考え方についての一面性や宗教関係者の盲目性なども好ましい条件に含まれるのであり、国教会や他の宗教信条などもスペンサーの教育論では、肯定的な存在となりうる。したがって問題なのは、多様性を排除しようとする単一の教義による圧力であったり、多様性を考慮しようとしないう教員の怠慢になる。それらの回避のためには競争的な条件が必要であるが、国家に囲まれてしまうことで、教員や聖職者は退廃し、結果として国民が盲目であるように、また従順であるように仕向けることになってしまう。

こうして、「政府の固有領域」では、救貧法や穀物法だけではなく、宗教・教育においても

政府は極力介入すべきではない。その理由は神が与えたより完全なる方向へと人間社会は向って行く自然的な力を有しているのであり、より発展するために神は多様性を付与したという不可知論を展開している。

結果としての神のデザインが明確にされ、完全な社会状態を描写したものが『社会静学』である。科学的に表現すれば『社会静学』は、一種の均衡状態の描写（静学）であって、不完全な状態からの動学的な経過を説明するものではない。スペンサーは功利主義を、限定的に受容する。つまり「政府の固有領域」で示したように、不完全で多様な諸個人の作用反作用を経たうえで、結果としての理想状態における「最大幸福」がもたらされる。そしてこれは神の目的であると指摘することで功利主義を受け入れる。しかし他方で、当時の功利主義者は最大幸福が個別主体の直接的な目的であると指摘していることを批判する。第3章の「神の考え方そしてその実現の条件」の結論部分では、個別主体そして経過ではなく社会全体そして結果についての考察に限定されることが明言される。(Spencer [1851] p.49)そして社会全体での「最大多数」の条件、「均衡状態」の分析から導出される条件が展開されることになる。この条件は第4章で展開される有名な第一原理「平等自由の法則」である。

「すべての人間は能力を行使する最大の自由を有するが、それは他の人が有する自由と一致するものでなければならない」(Spencer [1851] p.52)

しかしこの「平等自由の法則」が貫徹するのは理想状態であるから、現実と理想状態とを関連付ける工夫が要求される。スペンサーは基本的に予定調和を構想し、「政府の固有領域」でも指摘したように世の中の弊害さえも、主体や社会を強力に完全な理想状態へと導く誘因になるのであり、その過程で進化が進行すると模索されているのである。したがって現実においては権威的な存在の「介入」が利用されることになる。つまり社会における自然権が確保されるための介入である。(Spencer [1851] p.167)

3. 発生論における、ジェヴォンズの問題把握

2. で考察したように、スペンサーの議論は全体として神の存在を背景に据えた不可知論の立場であり、進化論の展開は他の自然科学の展開同様、神のデザインまたは意図とは乖離しないという認識をスペンサーは有していたと指摘できる。

しかし I の 2-1. で指摘したグラッドストーンと論争になった論文「社会科学は存在するか」(1872年)では、社会における法則性との関連で「発生 (genesis)」についての議論が展開されており、その議論はスペンサーの宗教的な姿勢についての疑問を生じさせることになった。

スペンサーは社会科学に対する否定を二つに分類する。ひとつは消極的な (passive) なも

(9) スペンサーの念頭にあるのはベンサムである。(Spencer [1851] p.46) またミルとスペンサーとの功利主義を巡るやり取りは、山下 [2008] に詳しい。

のであり、他方は、積極的な（active）ものである。前者は社会における超自然的な存在の介入を前提にし、社会における科学的法則を否定することになってしまう類のものである。スペンサーはこの例として、神の介入またはデザインを主張するショーンベルク（Schomburgk）の歴史的観点や、歴史上の偉業が神意に基づいた偉人によって達成されたとする例を挙げる。また後者については、社会における規則性や法則性を否定するという面で、直接的に社会科学の存在を否定するものである。スペンサーはこの例として、各人には自由意志が存在することで社会における規則性や法則性が否定されることになるとするフラウド（Froude）の批判と、法則そのものを力と捉えることで、反作用する法則（力）の存在により不変な法則が成立しなくなるとか、歴史的な因果関係が説明できない、歴史的に偶然的な事例を経済学者は需要供給法則と呼んでいるとするキングズレー司祭（Canon Kingsley）の批判を、引き合いに出す。

スペンサーは後者に対して、考え方の矛盾を明示することで反論を加える。自由意志を有する主体が構成する社会に法則性が存在しない場合に、立法は無意味になる。なぜなら立法は、悪を回避する目的でなされるのであるが、法則性が存在しない場合には、社会が悪に帰結するとする推論は成立しないからである。しかしフラウドやキングズレー司祭は、社会科
学者よりも、立法の有効性を認めている。したがって彼らは社会におけるなんらかの因果関係つまり法則性を認識しているものであり、社会における法則性を批判する場合に法則性を発見しにくい事例や極端な事例を針小棒大に主張しているとスペンサーは主張する。

他方で、スペンサーは前者に対して、さまざまな知識や経験が蓄積されている当時においてすべてが神意によって決定されているとする考え方も、偉人による歴史の展開も厳密に考察する必要があると主張する。偉人による歴史の展開については、偉人が「発生」する条件は、偉人の内部に存在する能力の根源が、偉人が存在する以前の社会や祖先にも求めることができるのであり、歴史を展開させる偉人の存在は、歴史的に初期の社会においてのみ認めることができるのであり、歴史が経過し社会状況の変化とともに世代が蓄積されるに従い、歴史展開における具体的な偉人の業績は否定されることになる。他方で、神意によって決定されているという考え方を、スペンサーは明確には否定していないが、やはり社会的な条件が変化し、知識や経験が蓄積されている以上、それらについての考察は必要になってくるという認識をスペンサーは有している。（Spencer [1873] pp.19-32）

こうして、スペンサーは当時の複雑化したまたは発展した社会における法則性の存在可能性を認識する一方で、特定の個人の社会における貢献、そして、この個人が「発生」する事情について懐疑的に考察を行っていく必要性を説いたのである。

しかし能力を有する、偉業を成し遂げる特定個人が「発生」する条件が、社会的に発展する中で希薄化するというスペンサーの考え方は、不可知論としての神のデザインまたは意図を不明確にする印象を与えることになる。スペンサーとは異なり、スコットランドからの移

民を父に持ち、最初は長老派（プレスビテリアン）に属していたが、その後国教会に改宗している敬虔なグラッドストーン⁽¹⁰⁾にとって、スペンサーの考え方は、神の存在が「法則」へと後退していくように映ったと指摘できる。

さらに、次のジェヴォンズの言葉に耳を貸す必要がある。

「進化論に対して困難な感じは受けないのですが、ダーウィンやスペンサーのような天才的で知的な人が、どのように生物の形態を、＜諸原因についてのいかなる恣意的な配置も用いずに＞理解するのかという点は困難を感じます。スペンサーはそこまで行っていると思うのですが、ダーウィンについてはそのような発言をしているかどうか思い浮かべることはできません。」（PC IV p.42）

この言葉は、形態の「発生」についてのスペンサーの考え方に依存する。つまり、偉人が国家を激変させる場合に、その激変の原因は、偉人が生み出される前の時代の状況と祖先に求められるとしており、社会的に獲得された漸進的な変化が後に伝えられていくという社会的漸進的な進化の考え方である。該当箇所を引用しておこう。

「偉大な人間が……国民を変えることが事実ならば、彼が進化しうる前に国民の進歩を生み出す祖先の変化が存在したことになるだろう。偉人が社会を変える前に、社会は彼を生み出したのである。そのために偉人が最初の人間となる全ての変化の主原因は、彼が生み出された前の世代にあるのだ。」（Spencer [1873] p.25）

したがって「社会科学は存在するか」というスペンサーの論文では、突然的にまたは不可思議な形態の「発生」ではなく、必然的蓄積的なメカニズムが社会科学の法則性という点から展開されることになったことに対して、ジェヴォンズは批判的に見ていたと指摘できるだろう。

Ⅲ. スペンサーの歴史的解釈へのジェヴォンズの問題把握

Ⅱ. で示したように、ジェヴォンズはスペンサーの論文「社会科学は存在するか」の中で形態または偉人の「発生」について、歴史的蓄積的な進化が社会の中で漸進的に進んでいくという論理において、不可知的な神の「恣意」が突然的な発生をもたらす可能性までもスペンサーが否定してしまっているとジェヴォンズには思われた。

スペンサーの社会進化論は、Ⅱ－2. で明確にしたように、均衡的な社会静学状態へと近似的に社会は進化していく過程にあるとする考え方に裏付けられている。したがって歴史は、その過程を証明するものになるはずである。またそのようにスペンサーは信じていたと指摘できる。⁽¹¹⁾

しかしこの楽観主義的な考え方は、やはりジェヴォンズによって、批判されることになる。

(10) Hirsh[1931] p.29

ジェヴォンズは『貨幣及び交換機構』の序文において、次のようにスペンサーの『社会学研究』の科学としての未成熟さを指摘する。

「道徳的政治的科学が（言語学における）初期文法や（数学における）単純な計算に習熟していない人によって、継続的に議論されていることは、ハーバート・スペンサー氏の『社会学研究』によって示されるように、道徳的そして政治的科学の決定的な災難である。そのために、極端な構想や誤謬が時折展開される。」（Jevons [1875] p.iv）

ジェヴォンズは、通貨と貨幣問題について当時において様々なスタンスに立ち、様々な政策提言が行われている状況において、科学的な分析を展開しようとして『貨幣及び交換機構』を著したのである。そして多様な見解の中には、紙幣増発による貧困削減や大蔵省証券により全ての問題を解決しようとするものや、他方で、金の製造価格の固定化に対する反対論などが存在していると把握される。そしてスペンサーは最後に指摘した考え方の持ち主としてジェヴォンズによって次のように批判される。

「ハーバート・スペンサー氏は『社会静学』において、次のような学説を進めた。雑貨店が我々に茶を与えてくれるし、パン屋は我々にパンを与えてくれると信じるように、我々はヒートン親子会社あるいは、バーミンガムの他の企業のいくつかが、それら自身の危険と利益で、ソブリン金貨やシリング貨幣を供給することを信じてよいだろうと。スペンサー氏は良いお茶を売る雑貨商や安全で誤魔化さないパンを売るパン屋に、人々は自ら好んで行くように、正直で成功する製造者が市場支配権を掌握し、その製造者の貨幣が劣悪な貨幣を追い出さだろうと考えた。

……この例に関してスペンサーは、一般的な原理を例外的な事例まで押し広げたが、例外的な事例ではうまくいかない。スペンサーは……重要なグreshamの法則を見過した。……製造が自由になされると割引された価格で雑貨を販売する者が、最高の通商益を産むのである。」（Jevons [1875] pp.63-4）

ここで利用されているのは、「悪貨は良貨を駆逐する」というグreshamの法則である。序文の内容と合わせて理解すると、スペンサーは他商品と貨幣との相違を理解せず、したがってグreshamの法則が認識されていないという問題と指摘できる。

ジェヴォンズがスペンサーからひも解いたと推測されるスペンサーの考え方を見てみよう。

『社会静学』「第29章 通貨、郵便制度、その他」において指摘されるが、またⅡ．で見たように、貨幣を自由に発行することを禁止したり、商品との交換において既存の認められて

- ✓ (11) さらに、Ⅱ－3.で指摘したように、フラウドやキングズレー司祭を批判する際に、彼らは、社会法則性を認めないはずであるのに、社会法則性をより重視する社会学者よりも立法行為の効率性を認めるとスペンサーは指摘したが、社会法則性を重視する社会学者がなぜ立法行為の効率性に対して少なくしか信頼性を置かないのかには明確な指摘がなされていない。しかし、自然同様に社会も自由状態に置かれる方がその法則性をより速やかに明確に展開することになるとするスペンサーの考え方を示唆しているとも指摘できるだろう。

いる銀行券や鋳貨の受け取りを強制することは、交換における「平等自由の法則」と矛盾することになるとスペンサーは指摘する。(Spencer [1851] p.243) スペンサーにとって貨幣がどのようなものになるかは、社会の構成員の道徳性に依存することになる。不正直なものが多い場合には、他を信用しない社会であるので、貨幣自体に価値があることが裏付けられている鋳貨が広がることになるのに対して、正直者が多い場合には、貨幣自体に価値がないものであっても流通することになるのである。⁽¹²⁾しかしジェヴォンズが指摘した「グレシャムの法則」、つまり名目価値が等しい劣等な鋳貨が製造されると、劣等な鋳貨しか流通に利用されず、優等な鋳貨は保蔵されることで流通から排除されてしまうという貨幣価値維持の問題については、スペンサーはつぎのように指摘することで、社会的な進化を前提にした楽観的な姿勢を有する。

「恐らく、多くの人にとって、国家の鋳造だけが鋳貨の偽造の拡大を回避できると思われる。しかしこのことを仮定する人は、次のことを忘れている。つまり自然システムの下では、現状と同じように、害悪に対抗する安全装置が存在することになるのだ。悪貨が良貨と区別できる容易さが、貨幣の純粋性の保証であるし、この保証は現在と同じように効率的なものとなるだろう。さらに、「偽造者」の処罰によっても生まれる追加的な安全は、また提供されることになる。」(Spencer [1851] pp.245-6)

IV. おわりに

ジェヴォンズは、スペンサー及びダーウィンの進化論に対して、ニュートン以来の科学において、これほど重要なものはないと指摘している。(Jevons [1877] p.762) しかし同時に、その科学の学問的な未成熟さしたがって仮説性をも認識していた。

ジェヴォンズの科学的方法論では、I. で示したように、反証主義的な立場であり、神の存在も、肯定的に証明することはできないかもしれないが、逆に反証できない限り、仮説として残存し続けると認識されている。

そして阿部 [2010] で見たように、社会的な発展の中で展開する分業と、その分業に対応する労働者の関係とは、ジェヴォンズの中でスペンサー進化論に対する肯定的な解釈へと結びついてたと指摘できる。

しかし、他方で、ジェヴォンズはスペンサーの科学的方法論における問題提起も行っている。一つは論理的と言ってよいかもしれないが、スペンサーが神のデザインについて、他の思想

(12) そのように鋳貨や紙幣または他の媒体により、社会では「自己規制(Self-regulating)」が展開されることにより、通貨制度はうまくいくのであり、国家の介入は不要でもあり、好ましくもないとスペンサーは主張する。またスペンサーは、例として国家規制のあるイギリスとそれらの存在しないスコットランドとを比較し、人口の違いを考慮したとしてもイギリスはスコットランドの約3倍もの通貨量が必要となっていると指摘することで、イギリスの通貨システムの効率の「悪さ」を指摘する。

家を引用し批判しながら、社会科学的な法則成立の根拠を見出そうとする中で、進化論的に言えば歴史的な蓄積とは無関係の「突然変化」が形態に生ずる可能性までも否定することになるものであり、スペンサーの考え方では反証主義的な姿勢が貫徹されないことになってしまう可能性をジェヴォンズは見出していたと言える。

さらに、貨幣発行の自由化に関する問題についても、スペンサーは仮説的推論を進めすぎているとジェヴォンズは明確に指摘している。

ジェヴォンズがスペンサーに問題点を見出している側面は、過去からの帰納的推論に関連すると指摘できる。偉人の出現や歴史的事変の動因に関して、さらに貨幣発行自由化の歴史的分析に関して、ジェヴォンズは前者の場合には法則性では把握できない可能性のある事例の分析を示唆し、後者の場合には歴史的事実では反証される仮説であることを指摘したと言える。

スペンサー進化論について、ジェヴォンズの問題はどのように解消されるのかと言う点であるが、後者については社会進化論の立場から、過去の起こりえたことが将来必ず起こるものではないという考え方にに基づき防御することになるであろう。しかし前者の突然変異またはその原因という面については、解消できないことになるだろう。

最後に本稿の問題点を指摘しておく。

スペンサー進化論についてのジェヴォンズの総括的な分析において、本論文では倫理学との関係が欠落している。この部分は『純粹論理学及び他の小作品』を考察しなければならない。さらにスペンサー進化論自体の把握についてもスペンサーの他の著作全体について展開する余白が存在しない。最後に、冒頭に指摘したハイエクとスペンサー、さらにシカゴ学派との関連性について、考察を進めなければならない。

<参考文献>

- 阿部 [2010] : 阿部秀二郎「ジェヴォンズの歴史的方法」『経済理論』和歌山大学経済学会, 第355号
- Bowler [2003] : P. J. Bowler, *Evolution: The History of Idea*, University of California Press, 鈴木善次ほか訳『進化思想の歴史』(上, 下), 朝日新聞社, 1987年
- Duncan [1996] : D. Duncan, *The life and letters of Herbert Spencer*, Routledge
- Hayek [1990] : F. A. Hayek, *Denationalisation of money, the argument refined : an analysis of the theory and practice of concurrent currencies*, Institute of Economic Affairs, 川口慎二訳『貨幣発行自由化論』東洋経済新報社, 1988年
- Hirsh [1931] : F. W. Hirsh, *Gladstone as a Financier and Economist with an introduction by Henry Neville Gladstone*, London
- Jevons [1875] : W. S. Jevons, *Money and the mechanism of exchange*, Palgrave Archive ed., 2001
- Jevons [1877] : W. S. Jevons, *The Principles of Science*, Macmillan and Co.
- Jevons [1897] : W. S. Jevons, *The Theory Political Economy*, Macmillan and Co., 小泉信三・寺尾琢磨訳『経済学の理論』日本経済評論社, 1981年

森村 [2005] : 森村進編『リバタリアニズム読本』勁草書房

PC: *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons VOL.I ~ VI*, Ed. R. D. C. Black, The Macmillan Press. Inc., 1972~1981

Spencer [1851]: H. Spencer, *Social Statics : or, The conditions essential to human happiness specified, and the first of them developed*, A. M. Kalley, 1969

Spencer [1981]: H. Spencer, *The Man Versus The State : with six essays on government, society, and freedom*, London

Spencer [1873] : H. Spencer, *Study of Sociology*, O. Zeller, 1966

山下 [2008] : 山下重一「ハーバート・スペンサーの『社会静学』」, 『國學院法学』第46巻第3号 (通巻第180号)